

招待席

佐藤 惣之助

さとう そうのすけ 詩人 1890 - 1942 神奈川県に生まれる。俳句から詩に転じ詩集を次々と上梓。小説や「赤城の子守唄」「人生劇場」など歌謡曲の作詞も手がけた大正期詩壇の異才。掲載作は、大正十年(1921)日本評論社刊『深紅の人』以降の詩集から抄出。

## 女の幼き息子に

### 潜水夫

潜水夫は武装した星の兵卒である。

金(きん)の頭を  
暗(やみ)の中にとごこめ  
全身に  
風と水の鱗や獣皮をつける。

兜をもつて、星を閉ぢ、世界を隔て  
波濤の眼鏡一重が  
同じ船の人々と千萬里を異にし  
水と星の世界へ出発する。

潜水夫は怒濤から生れた新らしき竜である。

金星の眼をかゞやかせ  
麻に赤絹の生命をよりまぜた綱と  
悲しき呼吸機管を引いて  
水中のふしぎな花咲く岩地へ降りてゆく。

海底は無人の荒野の如く

夜の恐怖とたゞかひ、死に襲はれ  
海の亡霊と打交つて、深紫の牛のやうに  
重々しい水中の開拓にかゝる。

潜水夫は哀れな海の十字架である。

港の下や荒磯の底にゐて  
はれやかな星や愛情といつしよに生活する  
地上の妻や妹を  
天の燭光のやうに仰ぎながら

電気ランプをともし、斧(をの)をもち  
難破船の死骸の上に  
この世の金貨をさがしにゆく  
武装した骸骨である。

## 青い桃をもつて

青い桃をもぎとつて  
ふところへ入れると  
女のやうな  
華麗な感情になる  
心臓に  
桃がかちあふ  
田舎道は熱烈で  
喰ひ缺くと桃は真赤になる  
自分は松の木によりかゝつて  
川の南風をうけながら  
大きい田舎の女と  
真夏のおしやべりをする

## 過ぎし日

うつくしかつた情熱の煙ともわかれ  
もつともわびしい田舎へやつて来たものにとつて

四月のうすい春蘭やまつ白な木の花の  
ざわざわとして吹きすさぶ色にふれるとき  
さらにさらにあざやかな淋しさが  
夕暮の匂ひとともにしんめりと身にながれる  
いかなれば今さらに自然界の春の  
こんなにもすがすがしくはれやかなるぞ  
その眼その身にも似る事なく  
日日に遠のく美しいいろいろの思ひを  
いきいきととびちらしてしまつて。

## めぐりあひ

ふかい年月のあひだ僕のところに  
るゐるゐとしてかくれてゐた美しいものが  
今こんなにも明るい地球の春の朝紅(あさやけ)となつて  
宝玉をふくんだともし火のやうに  
かくかくと僕の眼にうかんで来たのか  
それは逢ふべくして逢へなかつた  
心の城の姉妹のやうに  
このきよらかな朝の境界線にたつて  
ふたたびめぐりあひし喜び！  
あらあらしかつた僕は今さらに  
その尊い姉妹を尊敬しようと思ふ。

## 青胡瓜

味爽(よあけ)の胡瓜をもいでくれ、従妹よ  
風に洗はれる三日月のやうな眼つきをして  
僕はその青い小さな錨を畑でたべよう  
何よりもうれしく露をかんじ、露にしみ  
僕が目ざめを感じてみて  
朝焼けの光線に吹きつらぬかれ  
僕の眺めの中に  
鮮紅色の季節の娘のやうに扮装して

朝の胡瓜をもいで来てくれ。

## 青梨

水よりしづかな、しづかな  
葉がくれの、曇れる野の色に  
つやつやした風のふるるところを愛せよ  
その颯とした新しい匂ひと  
そのささやかな梨の実の  
午前中の青い孤独が  
静かな汝の眉の上に  
画のやうに懸かるところに立つて。

## 千鳥の帆走

空気の笛を吹けよ、若者ら  
爽涼たる宝石いろの砂原を  
あちこちと帆走する千鳥を喜びながら  
あの色のよい形と声の  
朝の半影を身にうつし、影を射つて  
海青いろの波濤と岩との  
このわびしい清らかな場所を  
遊星の羽のやうに耀やかしめよ。

## 所有権

村村の静かな地主達！  
僕はこの立派な雑木林と草つ原の  
あたらしい二重三重の権利を感情で争ふ  
僕は君達の風と大気と精神を  
木木がしつとりととりかこみ  
どんなに地球の生の神神と  
あでやかな季節の娘たちによつて

大きく味方され力を得てゐるかが  
うらやましくてたまらないから。

## 女の幼き息子に

幼き息子よ

その清らかな眼つきの水平線に

私はいつも真白な帆のやうに現はれよう

おまへのための南風のやうな若い母を

どんなに私が愛すればとて

その小さい視神経を明るくして

六月の山脈を見るやうに

はればれとこの私を感じておくれ

私はおまへの生の燈臺である母とならんで

おまへのまつ毛にもつとも楽しい灯をつけてあげられるやうに

私の心霊を海へ放つて清めて来ようから。